

上海レポート

令和4年2月号

Vol. 18



公益財団法人 大阪産業局 上海代表処 (大阪府上海事務所)

中国上海市延安西路 2201 上海国際貿易中心 408室 200336 Email osaka@ibo-sh.com.cn
TEL 86-21-6270-1901 FAX 86-21-6270-1351 http://osaka-sh.com.cn

20220207 号	2022 年「春節」の様子	秘書 孫芸
20220214 号	春節	所長 南浦秀史
20220221 号	新しい中国語「元宇宙」	所長助理 徐潔
20220228 号	上海駐在を終えて思うこと	副所長 大山知宏

2022 年「春節」の様子

2022 年が始まりました。日本では 1 月 1 日を正月として連休となりますが、中国では旧正月を祝う事が一般的です。この旧正月を中心とした連休のことを「春節」と呼び、中国では毎年大々的に祝われています。

平常時であればこの時期は帰省や旅行などで多くの人々が移動し賑わうものの、新型コロナウイルスの影響で、また、今年の正月中に北京五輪が開催されるため、人流が大幅に抑制されました。各地域でも元旦・春節にかけて帰省をやめるような呼びかけが行われました。

特に北京では、感染者が 1 人でも出た地域からの入境に際して、PCR 検査や 2 週間の健康管理を義務付けています。上海でも、不要不急の市外への移動は控えるよう呼びかけられ、行事などを計画しないように求められています。

このことから、都会から田舎への里帰りが控えられ、今いる場所で春節を楽しもうとする動きが見られます。

都市部に暮らす若者世代(90 年代生まれ、2000 年代生まれ)の間では、「7 日間ずっと家にいるのは耐えられない」「遠出はできないから、近場でストレス発散したい」と考える人が多いようです。

中国の民泊サイト「途家」では、大都市周辺での民宿、例えば浙江省近郊の「裸心谷」という民宿が人気となり、自然に囲まれていて「密」を避けられる「別荘」のような場所で春節を過ごす人が増加しました。

このような近場・高級ホテル志向、「別荘型」の旅行は、今後のウィズコロナの新しい旅行の形となる可能性も考えられます。

春節といえば、やはりお年玉が欠かせないです。中国では、日本と同様に、春節の時期にお年玉を渡す習慣があります。

このお年玉は「紅包(ホンバオ)」とよばれ、もともと赤色の紙や封筒でお金を包んで渡すのが通例でした。しかし、現在ではデジタル送金による紅包(ホンバオ)がポピュラーになりつつあり、アリババの Alipay(支付宝)やテンセントの WeChatPay(微信支付)などが多く使われています。今年の春節は、帰省が控えられ親戚が集まる機会も少なかったことから、このデジタル送金での紅包(ホンバオ)の利用が増加したそうです。



春節

昨年の春節は隔離ホテルで過ごしたので、今年、初めて春節を体験しました。いろいろな発見がありましたのでレポートします。

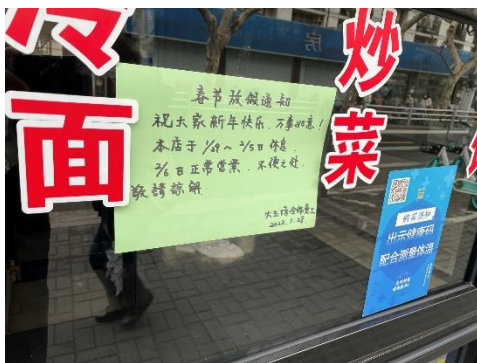
春節といえば旧暦(中国では農歴といいます。)の1月1日から始まるお正月休みのことですが、今年は1月31日が大晦日で、2月1日が元旦でした。中国では大晦日の夜に家族が集まって特別なご飯を食べることから、地方から都会に出てきている人達は故郷に帰ります。

街中は、コンビニや大手チェーンスーパーなどは正月も営業していますが、小さい商店は軒並み一週間前後お休みです。従業員も里帰りするので、店を開けられないとか。スーパーも流通や工場がとまっていますから、新鮮な野菜や肉、パンなどのデイリー食品は欠品、あるいは、日持ちのするものしか棚にはありません。日本も今年はコロナ対策もあり、正月休みを3日間しっかりとる動きがあったようですが、家族の絆を大切にしている中国では正月を休んで家族と過ごすという点は徹底しているように思います。

また、中国の春節といえば、爆竹や花火で盛大に祝うというのが、映画などで見ていた中国の姿でしたが、環境や安全の面から上海では外環状線の内側では花火や爆竹が禁止になっています。なので、お店でも売っていません。なかには、その気分だけでも味わいたいのか、大きな炸裂音とともに光がでる電子爆竹なるものまであるようです。

年賀状も職場にはカードがまだ少し来ますが、個人の間では Wechat で親しい人、しばらくご無沙汰していた人、お世話になった人などに虎のイラストなどととも新年の挨拶を送っています。

私はこれまで日本で、正月を新春ということに、まだ冬なのという違和感がずっとありましたが、中国の正月(春節)を経験して、新春ということがやっと腑に落ちたように思います。日本では新暦で正をお祝いしていますが、そもそもそれは西洋の制度を導入して近代化を進めた明治6年(1873年)以降のことで、よく考えたらこれは正月だけではなく、旧暦の習慣を新暦でやるところに、日本らしさがあるんだなと思いました。



新しい中国語「元宇宙」

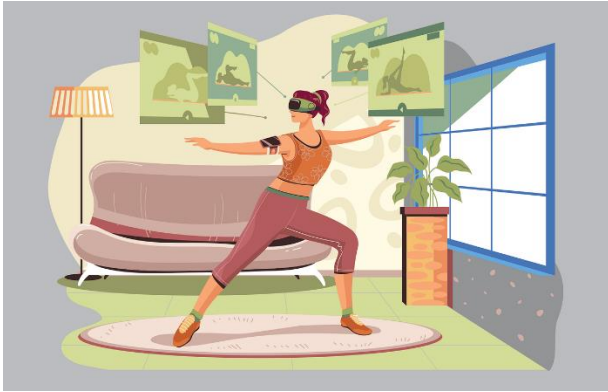
「元宇宙」という新しい中国語は、「メタバース」を意味しています。もともとは米国のSF作家ニール・スティーヴンソンが1992年に発表した『スノウ・クラッシュ』に登場する仮想空間の名前が由来です。

「元宇宙」は複数のユーザーが仮想現実内で同一空間・時間を共有できるシステムやサービスの事です。VR機器「Oculus Quest2」を展開している米国 Facebook 社のものが有名ですが、ゲームだけではなく、医療や建築など社会インフラ分野でも活用可能な技術です。中国でも「元宇宙」の技術開発は熱を帯びています。

中国人民政治協商会議の李安民委員は、「元宇宙は世界のデジタル経済未来の発展をリードし、上海の将来の発展に稀に見る新しい軌道をもたらすだろう」と述べています。元宇宙構想を巡って、現在、上海には中国国内で5G通信技術

者の約 50%、半導体チップ開発者の約 40%、人工知能開発者の約 30%が集結しており、多くの企業が元宇宙関連計画を推進しています。

「上海大劇院や上海コンサートホールを元宇宙に移し、誰もが没入して鑑賞出来る空間を創出する」、「上海市政府主催の大規模なショッピングイベントを元宇宙世界に移行する」等の計画も順調に進んでいます。李安民氏は「元宇宙時代には、現実と仮想現実を組み合わせた多くのシナリオ、アプリケーション、プラットフォームが現れるだろう」と述べています。元宇宙は科学普及・観光・消費等の幅広い領域にも新たな価値をもたらす潜在力があるのです。そこからは「新しい上海」に繋がる何か生まれるかもしれません。



上海駐在を終えて思うこと

今日は、駐在生活の最終日となりますが、振り返ると、2019年2月から始まった上海事務所での仕事も、あっという間に終わってしまったというのが実感です。

2019年は、日中のビジネス往来がとても活発で、大阪企業の展示会への出展対応、府内企業、府議会議員や府の幹部等の上海・中国への出張アテンド等、大阪からも多くの方が上海を訪れたと記憶しています。

2020年、春節を友人と過ごすために訪問した広州で、武漢のニュースを知りました。その後、2月に日本へ一時帰国となり、8月に西安経由で上海に戻りました。コロナにより日中の厳しい渡航制限が続く中、展示会に出展できない府内企業に代わって現場対応を行うなど、海外事務所としての拠点機能を発揮できたと思います。

2021年もウイズコロナの中、オンラインセミナーを活用した上海・中国のビジネス環境等の最新情報の発信や、府内企業が強みを持つ水素分野をはじめ様々なジャンルの展示会支援等、府内企業の海外ビジネスを盛り上げるため、力を尽くせたと自負しています。

3月1日から、日本政府も水際対策を緩和し、観光目的以外の外国人の入国が認められることになりました。海外でも、一定の条件を満たせば、隔離免除の国が増えてきており、国際的な人の往来が再開するきざしを感じています。

新型コロナの感染が落ち着き、渡航制限が緩和されれば、皆さまには是非とも、真っ先に今の上海を訪れて欲しいと思います。特に、初めて訪れる人は、ステレオタイプのイメージとはあまりにも異なる上海に、(いい意味で)とても驚かされると思います。上海はとても変化の早い街です。私も、次に訪れる上海でどんな新しい発見ができるか、今から楽しみでなりません。

